様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１８４１９

研究課題名（和文）少数者の恐怖―グローバル化時代の新たなエスニック・リスクに関する学際的研究

研究課題名（英文）Fear of Small Numbers: Interdisciplinary Study on Emerging Ethnic Risks in the Globalizing World

研究代表者
滝澤　克彦（Takizawa, Katsuhiko）

長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：８０５１６６９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,900,000円

研究成果の概要（和文）：期間全体を通じて、日本、モンゴル、米国、香港および台湾において、それぞれ移民・難民や少数派宗教の信者などがさらされるエスニック・リスクの様態について調査・分析を行い、国内外の学会等での議論を通じて他地域との比較も行った。それによって、マイノリティにとって孤立が重要なリスク要因としてあることや、それに対応する様々な支援の一つとして宗教がある程度重要な役割を果たしていることなどを明らかにした。また、国外での学会発表やインドネシアでの調査などを通じて、本テーマに関わる国際的な研究ネットワークを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　マイノリティに対する差別や暴力は普遍的な課題であるが、グローバル化の進展や情報技術の発達によって、新たな形の脅威が生じてきている。他者に対するイメージや言説が情報技術を通じてグローバルな規模で容易に共有されるようになった結果、マイノリティに対する憎悪や反感にもとづく差別や暴力は、偏在的かつ極めて予測不可能な形で発現するようになっている。
　本研究の社会的意義は、このような新たなエスニック・リスクとしてのマイノリティに対する脅威、特にその極端な発現形態としての暴力について、その発生メカニズム、派生的影響、解決策などの究明に関わる学際的議論と情報交換のためのプラットフォームを構築したことである。

研究成果の概要（英文）：We investigated and analyzed the ethnic risks to which immigrants, refugees, and adherents of minority religions are exposed in Japan, Mongolia, the United States, Hong Kong, and Taiwan, respectively, and made comparisons with other regions through discussions at academic conferences in Japan and abroad. Through these studies, we found that isolation is an important risk factor for minorities, and that religion plays an important role to some extent as one of the various forms of support to cope with this risk. In addition, through presentations at academic conferences outside Japan and surveys in Indonesia, we have established an international research network related to this theme.

研究分野：宗教社会学

キーワード：エスニック・リスク　マイノリティ　テロリズム　暴力　エスノスケープ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2018 年、インドネシアでキリスト教会を標的とした自爆テロが発生した。また、2019 年には、ニュージーランドと米国で、それぞれイスラム教徒とメキシコ人をねらった銃乱射事件が起きている。さらに、2020 年に始まるコロナ禍においても、世界各地でマイノリティがしばしば暴行等の被害を受けている。これらに共通するのは、「マジョリティ」に属する加害者が、極めて身近な「マイノリティ」を標的にしているということである。それらの暴力の背景には、社会のマジョリティ側の一定の「共感」（あるいは少なくとも「無関心」）が控えており、そのことが問題の解決をさらに困難にしていると考えられる。

文化人類学者の A・アパデュライは、自己アイデンティティに関わるイメージ（エスノスケープ）が、グローバルなネットワークに乗って流通し、一つの内集団へと収斂したとき、マイノリティに対する不安と憎悪が醸成されることと（*Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, 1996）、そのような不安と憎悪が集団の純粋性を求める衝動と結びついて暴力を発現することを論じている（*Fear of Small Numbers: An Essay on the Geography of Anger*, 2006）。実際、多くのマイノリティに対する差別や暴力が、メディアにあふれる憎悪表現の影響を強く受けているように、この枠組みは妥当なものであると思われる。しかし、この妥当性は、それだけ問題の複雑さと解決の難しさを示唆している。

本研究の代表者が調査を行うモンゴル国でも、2000 年以降、排外感情が高まっており、実際に極右団体による外国人を狙った襲撃事件などが発生してきた。このような過剰な民族意識の形成について、代表者は科研費研究「モンゴルをとりまくエスノスケープとアイデンティティの重層的動態に関する実証的研究」において実証的な考察を深めてきた。一方で、このような事態が、より過激な形で発現する潜在的可能性を読み解くためには、テロ発生地域の状況なども踏まえた国際的・学際的な議論と情報交換の必要性を痛感するようになっていた。

そのため、本研究の代表者が代表を務める長崎大学重点研究課題「「リスク社会」を生き続けるための人文社会科学の超域的研究拠点形成」で、この問題に関する学際的議論の可能性を探ってきたが、2019 年 8 月に開催した国際会議“Global Risk, Security and Ethnicity”や、2020 年 9 月の世界国際政治学会主催のウェブフォーラム“New Threats, New Movements, New Nationalisms”において共同研究の可能性を確認し、本研究の構想に至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、現代社会の新たなエスニック・リスクとして増加傾向にあるマイノリティに対する脅威、特にその極端な発現形態としての暴力やテロリズムについて、その発生メカニズム、派生的影響、解決策などの究明に関わる学際的議論と情報交換のための国際的研究プラットフォームを構築することである。

マイノリティに対する差別や暴力は普遍的な課題であるが、グローバル化の進展や情報技術の発達によって、新たな形の脅威が生じてきていることは、しばしば指摘される。人の流動化は多様な属性をもつ人々同士の接触機会を増大させ、他者に対するイメージや言説が情報技術を通じてグローバルな規模で容易に共有されるようになった。その結果、マイノリティに対する憎悪や反感にもとづく差別や暴力は、偏在的かつ極めて予測不可能な形で発現するようになっている。さらに、コロナ禍における事例をみても分かるように、災禍等による不安はマイノリティへの脅威を一層高める傾向がある。

このような新たな形でのマイノリティに対する脅威については、社会科学の領域では、上述の A・アパデュライによって一つの理論的枠組みが提示されている。しかし、その経験的な調査方法の確立と事例の蓄積については、今後の課題として残されている。

以上を踏まえ、本研究では、実際に発現したマイノリティに対する暴力やテロリズムの事例を、現地の研究者もまじえて学際的に考察し、その要因を実証的に分析するための国際的な研究協力体制の確立を目指す。

３．研究の方法

各メンバーは、担当の調査地を中心に、マイノリティに対する脅威の高まりと潜在的危険性、国家の対応策とその影響、NGO などの関与等について調査する。また、インドネシアにおいて、マイノリティへ向けられたテロリズム発生の経緯と背景、その波及的影響と対応策等に関する現況とその研究状況について、海外研究協力者の協力のもと情報収集する。さらに、国内外の研究者の学術交流を深め、本研究の課題に関わる学際的・国際的議論のためのプラットフォームを構築する。

４．研究成果

本プロジェクトの研究成果は、各メンバーの担当する調査地におけるエスニック・リスクの分析と海外の研究者とのネットワーク形成である。

各メンバーは、自身の調査地を中心に、マイノリティに対する脅威の高まりと潜在的危険性、

国家の対応策とその影響、NGO などの関与等について調査を行い、その成果につい国内外の会議や学術雑誌等で発表してきた。

滝澤は、現在のモンゴル国におけるエスニック・リスクとしてのナショナリズムの高まりについて分析を行った。その際、社会主義時代の粛清をめぐる歴史的言説を対象とし、民族の歴史における「死者」をめぐるイメージが政治問題化され、ナショナリズムに結びつけられていく様態について明らかにした。また、外国に生活するモンゴル人のコロナ禍におけるヘイト・クライムの状況についても米国を中心に調査した。その結果、コロナ禍にモンゴル人に対するヘイトが存在しなかったわけではないが、むしろモンゴル人のなかでの宗教的差異にもとづくナショナリズムと結びついた軋轢や確執が存在していることが明らかとなった。

一方で、滝澤は日本に生活する移民の孤立とそのリスクを、「マジョリティ」として措定される「国民」の宗教意識および民族意識と関連付けて考察する研究も行った。具体的には、ベトナム人技能実習生の死体遺棄事件をとりあげ、その出来事に至る経緯に移民の孤立があり、その状況で行われた死産とその後の処理が、「国民の一般的宗教感情」を害するという理由で死体遺棄罪とされたが、このような法的規定自体がマイノリティの排除につながる可能性について指摘した。

コンペルは、軍事占領下におけるエスニック・リスクに着目して文献調査を行った。日本占領における占領者と被占領者間の緊張関係やエスニシティの関係を踏まえた上で、現代アフガニスタンあるいはイラクにおける紛争と占領、さらに南アフリカにおけるエスニック・リレーションズと地域紛争・核拡張政策との関係についても調査した。比較論的観点から軍事占領下におけるエスニシティおよび軍民関係について分析した成果は、国際政治学会などで発表された。

伍は、コロナ禍の香港において、ソーシャル・スティグマ化された少数者（感染者、医療関係者、貧困層など）の現状や、ワクチン接種をめぐる香港社会の対立について考察した。特にワクチン接種の実施初期に、ワクチン支持派と反対派がお互いに批判し、相手のワクチン接種に対する態度を政治的な立場に結び付けようとする「相互スティグマ化」の現象について分析した。また、コロナ禍の香港におけるバイオポリティックスと宗教の関係をとり上げながら、危機的状況下におけるマイノリティへの脅威に対して宗教の社会活動がどのような意義をもちうるかを分析した。さらに、香港から台湾へ移住した人びとのエスニック・リスクやそれに対する宗教団体の支援などについて調査し、その成果を EASSSR 等の学会で発表した。

国際的な学術交流としては、2021 年 9 月には、国際会議 New Nationalisms and Changing Patterns of Conflict（国際政治学会紛争安全保障民主化委員会と共催）を開催した他、2022 年 10 月 27 日には、インドネシアの宗教的マイノリティに対する脅威としてのイスラーム過激主義をテーマにしたセミナーを実施した。そこで、インドネシアのテロリズム団体が存続しながらも非暴力化してきた経緯の分析を共有し、他地域のケースとも比較しながら情報交換と議論を行った。2024 年 1 月には滝澤がインドネシアを訪問し、ガジャマダ大学などで宗教的マイノリティのリスクについて情報交換を行うとともに、インドネシアのキリスト教会を対象としたテロとその後の状況についてキリスト教会やイスラーム関連機関で聞き取り調査を実施した。

2024 年 3 月には西日本宗教学会と共催で「多文化社会におけるリスクと宗教」と題する公開シンポジウムを開催し、ゲストスピーカーも招いて移民や難民などの抱えるリスクとそれに対する宗教の支援について議論を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 翁 康健、清水 香基、伍 嘉誠	４．巻 12
２．論文標題 中国少数民族と漢族の間における格差	５．発行年 2023年
３．雑誌名 21世紀東アジア社会学	６．最初と最後の頁 76-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20790/easoc.2023.12_76	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Radomir Compel	４．巻 9
２．論文標題 Impact of Extreme Weather Events in Wartime Okinawa	５．発行年 2023年
３．雑誌名 多文化社会学研究	６．最初と最後の頁 85-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 滝澤克彦	４．巻 8
２．論文標題 モンゴルの大粛清と「死者の記憶」――記憶の集合性についての批判的考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 多文化社会研究	６．最初と最後の頁 143～157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Radomir Compel	４．巻 8
２．論文標題 South Africa's Apartheid Regime and its Path to the Proliferation of Nuclear Weapons	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Global Humanities and Social Sciences	６．最初と最後の頁 335～349
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 コンペル　ラドミール	4．巻 -
2．論文標題 変動する境界――南西諸島の分断軸	5．発行年 2021年
3．雑誌名 知られざる境界のしま：奄美	6．最初と最後の頁 36～44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伍 嘉誠	4．巻 2021
2．論文標題 新型コロナウイルスとナショナリズムへの試論	5．発行年 2021年
3．雑誌名 21世紀東アジア社会学	6．最初と最後の頁 57～73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20790/easoc.2021.11_57	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　4件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 Ng, Ka Shing
2．発表標題 Religion and Biopolitics in Hong Kong: Religious Responses to Government's Zero-Covid Measures
3．学会等名 The 4 th Annual Meeting of East Asian Society for the Scientific Study of Religion（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Radomir Compel
2．発表標題 Climate and Conflict: Lessons from the Past in East Asia
3．学会等名 International Studies Association（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名 コンペル ラドミール
２．発表標題 戦後日本における米軍基地の進展
３．学会等名 日本地方政治学会・日本地域政治学会研究大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Radomir Compel
２．発表標題 Climate Security from Below, Philippine Political Science Association and International Political Science Association Research Committee on Security
３．学会等名 Conflict and Democratization Conference on Peace Building and Conflict Transformation amid Covid‐19 Pandemic（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 コンペル ラドミール
２．発表標題 「本土並み」の沖縄返還と国政参加
３．学会等名 長崎平和資料館連続公開市民講座「日本の現代史」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 滝澤克彦
２．発表標題 宗教とウェルビーイングをめぐる一考察 ―ベトナム人技能実習生死体遺棄事件の事例から―
３．学会等名 東ユーラシア研究プロジェクト2022年度全体集会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Takizawa, Katsuhiko
２．発表標題 アジャ・リンポチェのグローバルな活動と世界のモンゴル人社会
３．学会等名 International symposium on Buddhist Practices and Reincarnated Lamas in Contemporary Mongolia（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 滝澤克彦
２．発表標題 宗教社会学的観点からみた今日の宗教問題
３．学会等名 長崎大学教育学部平和・多文化センター講演会・討論会「宗教をめぐる対話・共生の可能性と不可能性」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Radomir Compel
２．発表標題 Fragility and Robustness of Intervention-based Peacebuilding Regimes (Social Risks in Foreign Military Occupations)
３．学会等名 International Political Science Association World Congress（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Radomir Compel
２．発表標題 Apartheid nationalism and nuclear proliferation in South Africa
３．学会等名 New Nationalisms and Changing Patterns of Conflict（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 伍嘉誠
２．発表標題 Hong Kong’s Resilience in the Face of COVID-19: The Role of Civil Society amid Adversity
３．学会等名 The International Convention of Asia Scholars（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 伍嘉誠
２．発表標題 香港における社会運動とコロナ禍にみる宗教と政府の葛藤
３．学会等名 長崎大学教育学部平和・多文化センター講演会・討論会「宗教をめぐる対話・共生の可能性と不可能性」（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Radomir Compel, Rosalie Arcalla Hall, Yuko Suda, Federica Infantino, Michael Minkenberg, Theodor Neethling, Lyailya Nurgaliyeva, Tadanori Inomata, Sergio Luiz Cruz Aguilar, Hazuki Sasaki, Yasmin Calmet, Tiago Tasca, Yea Jen Tseng, Cristina Valeria Puga Alvarez	４．発行年 2021年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 260
３．書名 Security and Safety in the Era of Global Risks	

１．著者名 Steven Ratuva, Hamdy A. Hassan, Radomir Compel, Michael Blain, Angeline Kearns-Blain, Masaki Kataoka, Mohd Aminul Karim, Jovanie Camacho Espesor, Sergio Luiz Cruz Aguilar, Ryo Nakai, Hiroko Kinoshita, Dai Yamao, M. Bashir Mobasher, Hala ThabetMiho Fukui, Chigumi Kawaguchi, Kalyango Ronald Sebba	４．発行年 2021年
２．出版社 Palgrave	５．総ページ数 390
３．書名 Risks, Identity and Conflict: Theoretical Perspectives and Case Studies	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	コンペル　ラドミール (COMPEL Radomir) (90528431)	長崎大学・多文化社会学部・准教授 (17301)	
研究分担者	伍　嘉誠 (NG Ka Shing) (90808487)	北海道大学・文学研究院・准教授 (10101)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
New Nationalisms and Changing Patterns of Conflict	2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関